青が消える　　村上春樹

教材のねらい

1　選定の理由

「青が消える」は、世界がミレニアムを迎えるというお祭り騒ぎの中で、主人公が襲われる喪失感と孤独感を端的にまとめている好短編である。周囲から青が消えるという出来事は一見突飛ではあるものの、それを除けば現代とほぼ変わらぬ社会状況を背景としている。執筆時期は一九九〇年代初頭だが、生徒たちにとっても想像力を働かせやすい舞台設定であろう。主人公の心情を描写する際の独特な比喩表現が効果をあげており、あっさりとした印象の中にも極めて寓意性の高い、すぐれた虚構作品となっている。

まずは「僕」という一人称で記述される主人公の心境を探っていくことが必要であるが、この作業は同時に、他の人物の言動を丁寧におさえていくことにもつながっていくはずである。したがって、第一に、主人公の言動の意味と、周囲の人物・状況との落差を読解し、第二に、比喩を中心とする表現・描写のあり方を読解することが課題であろう。そこから、人間を、その周囲の状況との関連の中で捉えていく視点を学んでいくことができるだろう。また、主人公の心情の中に生徒自身の経験をどう関連づけていくかが大切であり、さらに大きな社会的文脈へと広げ、少数者の価値観がかき消されていく悲哀の寓意と捉えることで、興味深い指導ができうる教材であると考え選定した。

2　指導のねらい

小説が虚構世界であると意識させる設定と展開であるため、初読の際には生徒たちの間にややとまどいがあるかもしれない。しかし、主人公の青をめぐる大切な記憶が別れた彼女とつながっていたことは、その青が世界全体から喪失していく中、主人公以外が関心を示さないという状況を理解する糸口となる。虚構の中に自身の真実、そして社会のしくみへの違和感を発見していくという作品に寄り添った読解を経験できるよう導いていきたい。

(1) 主人公の置かれている状況設定を細かく確認する。
(2) 「青」と「白」をめぐる比喩表現の象徴性を理解していく。
(3) 他の人物の言動とその意味から、主人公の喪失感と孤独感の深まりを考える。
(4) 全体の寓意性について、個人と社会の両面から話し合う。

3　評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ
(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ
(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(6) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(7) 「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ
(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(9) 「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ
(10) 進んで作品に表れているものの見方・感じ方・考え方をつかみ、現代の社会・文化について批評する能力を身につけようとし、学習課題に沿って、舞台設定や、比喩や象徴の意味を理解しようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕